

葬儀は、人間が人間であることの証し

満井秀城

(みつい しゅうじょう)

最近とみに「葬儀不要論」が世間を席巻している。

もちろん葬儀が華美である必要はない。葬儀費用の高額化が一因であるなら、高い料金を必要としない葬儀のあり方を早急に提案していかねばならないだろう。同時に、宗教的帰属意識の希薄化によって「葬儀は不要」と考える人も少なくないに違いない。かなり乱暴な言い方だが、ある面「信心のない人には葬儀は要らない」とも言える。なぜなら、他宗の論理では、信心のなかった人には追善供養が必要となるが、当流は追善供養としての葬儀ではないからである。

葬儀が不要と言う人もいれば、その一方で「ペット葬」を頼まれることもある。家族同様にかわいがってきたペットの死は、世の無常むじょうに心を致す機縁ではあるだろう。はたして、浄土真宗の「葬儀」と言えるかどうか、考えてみる必要があるのではないか。

浄土真宗の葬儀では、ご開山かいえんさまのご和讃、「本願力ほんがんりきにあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき」(『註釈版聖典』五八〇頁)を誦誦する。浄土真宗の葬儀とは、ご本願に出遇い、お念仏とともに浄土に往生された故人を讃え、同時に故人に縁を結ぶ人たちも、同じくお念仏の人生を歩むことを再確認する「仏縁ぶつえん」なのであって、仏徳讃嘆と、ご本願に出遇えた感謝の儀式が「浄土真宗の葬儀」なのである。遺族にとって、悲しい逆縁ぎやくえんを仏縁として受け止める尊い機縁であり、さらには、お互いが支え合って生きていることや、人と人とのつながりを味わうことのできる場でもある。葬儀は、故人にとっても遺族にとっても、それぞれ、人間が人間であることの証しである。

最近知ったことだが、首都圏のある地域では、葬式を行うと生活保護が止められるので、葬儀に來ないで欲しいと言われたそうである。葬儀が贅沢品ぜいたくひんと思われるのだろう。しかし、葬儀は人間が人間である証しであり、文化的生活を送ることを保証した憲法にも違反する事態でないかと思う。嚴重に抗議したいが、その前に、「そんな安いお布施おせでは行かないというお寺さんがいるんですよ」と言われたのでは、抗議しても説得力を持たない。我々僧侶も律すべきは律していかねばならないであろう。

(本願寺教学(伝道研究所所長))